



自分にとって、本当に大切な一冊の本との出会いを求めよう

遠山 文吉

ある友が言いました。「自分にとって本当に必要な本と出会えた人は幸せである。そのような本は多く必要ない。一冊で良い。」と……

これまで私が出合った本はたくさんあります。しかし、それらはすべて必要だったわけではありません。何らかの条件に誘われて買ってしまっただけの本、読み始めて間もなく「もういいや」と書棚の片隅に置いた本、夢中で読み漁った本等々、様々です。

学生時代に虜になった本があります。それは、牧野富太郎博士の著書『植物図鑑』です。その本に描かれた植物は、写真でなく手書きで、実に詳細な観察に基づいています。大学1年生から3年間、夏休みに日光の営林署でアルバイトをしました。「高山植物監視員」の腕章を付けて、毎日20〜30キロ、日光の山々を歩きながら高山植物の保護に努めたのです。毎年1か月ずつ仕事をしました。その時、いつも持ち歩いていたのが、この図鑑です。一つ一つの花をこの本で確認しながら歩きました。本物と出合った時の喜びはこの上ないものでした。目の前の植物と本に描かれたものを見比べて「本当にこの植物はあるんだ！」と感動に打ち震えました。3年間でこの本はボロボロになりました。私に植物の見方やかわり方を教えてくれた貴重な一冊です。

さて、『ぼるらんど』262号（2009年4月）に屋部操さんが書かれた「音楽療法から読む『音楽利害』——明治期の音楽書を読むとき」を見つけました。私は、この本に学生時代（40年ほど昔のことです）に出合っています。日本における音楽療法の歴

史を学ぼうとして東京藝術大学の図書館に潜り込んで探しているときに、偶然出合った本です。音楽療法は、日本に生まれた世界ではありません。しかし、この本の著者である神津仙三郎は、明治24年に音楽が人間に与える影響を利と害の観点で見つめていたことに大きな驚きを覚えたことを思い出します。特に音楽が人間に与える〈害〉にまで目を向けていたことに敬意を感じていたので。音楽療法に取り組む人は、常に音楽が人間に与える影響を考えなければなりません。音や音楽は、良い影響を与えるだけでなくマイナスの刺激にもなるのです。神津専三郎は、118年も前にこのことを見つめていたので。誠に驚きです。

かつて私は、音楽療法を考える上で必要な書物を探し求めました。その中で、マックス・ピカート著の『沈黙の世界』（佐野利勝訳 みすず書房）との出会いは本当に重要でした。音楽療法で扱う音・音楽の特性を考える上で大切な示唆を得ることができたのです。この本を通して沈黙の存在、重要性を学んでは、対象者に対して音や音楽を提供する際に細かい配慮をすることができるようになりました。同時期にエドワード・ホール著『かくれた次元』（日高敏隆、佐藤信行訳 みすず書房）にも出会いました。私は、この本から人と人との心理的な距離関係、空間の持つ緊張感等、音楽療法における場の設定に深く関係のある知見を得ることができました。

自分の人生に、そして生き方に大きな影響を与えるような一冊の本との出会いを期待しましょう。

●とこやまぶんきち 本学教授（音楽療法）